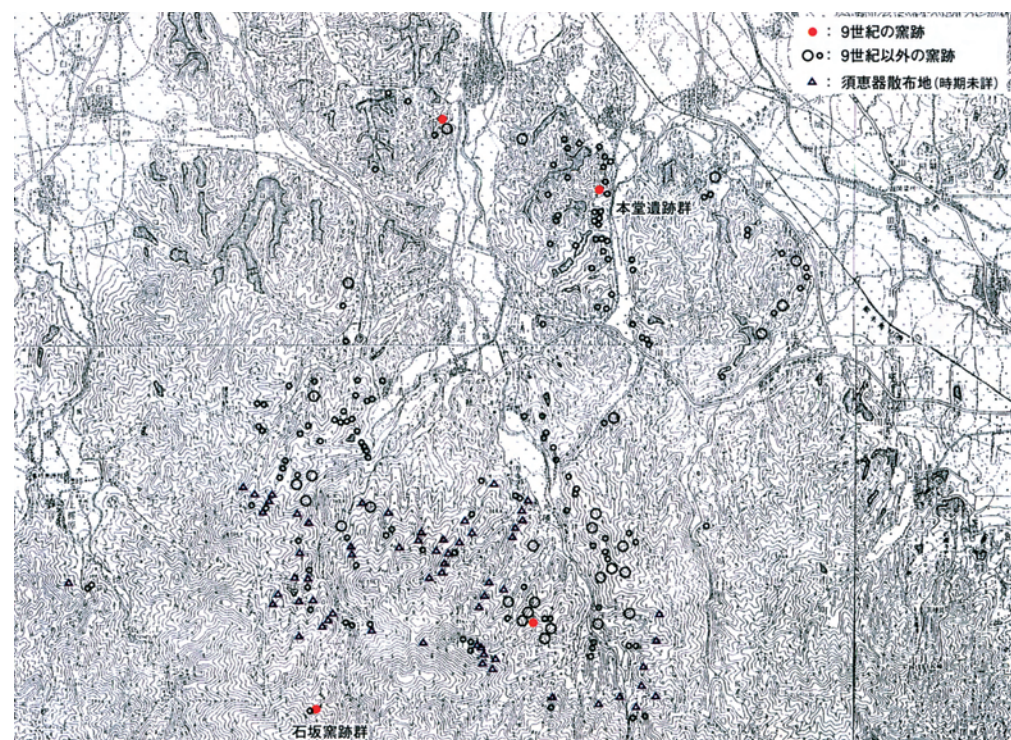


## 生産の衰退と終焉（9世紀）

9世紀に入ると、牛頸須恵器窯跡では窯の数が急減します。各支群とも窯は確認されますが、数は1～2基程度で、全体の生産量は前代に比べて極端に落ち込んでいます。また、焼かれる器種も減少しています。壺などを含んで豊富な器種が焼成された前代までとは異なり、蓋杯と杯・皿などの限られた器種のみが焼かれているようです。

この時期の窯で、最も注目されるのは石坂E-3号窯跡です。9世紀中頃の操業と考えられるこの窯は、それまで牛頸須恵器窯跡で確認されていた窯とは異なり、焚口が絞り込まれる小判形の平面プランをとります。ここで生産されたのは、蓋杯・鉢・甕・大甕です。特に大甕は8世紀後半以降熊本県荒尾地域の窯跡群で生産されるものと同じ特徴を持つもので、口縁の部分が二重口縁になるものです。8世紀後半代に甕を焼くことを中断していたことと、甕の特徴を考えると、全く異なる技術が使われていると言えます。こうしたことから、石坂E-3号窯跡の操業には肥後地域の須恵器工人が関わっていた可能性が高いと考えられます。

石坂E-3号窯跡が操業された後、周辺で窯が継続して操業が行われた様子はありません。窯跡は、牛頸須恵器窯跡の中でも最も山奥にありますが、さらに奥の山ではこれまで須恵器窯はまったく見つかっておらず、牛頸須恵器窯跡における須恵器生産は、このころ終了しているものと考えられます。



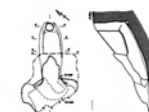
9世紀の窯跡分布図



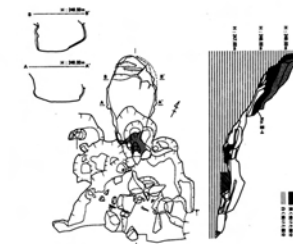
本堂5次6号窯跡



石坂窯跡群E地点（中央は3号窯跡）



本堂5次6号窯跡実測図  
(S=1/300)



石坂窯跡群E-3号窯跡実測図  
(S=1/300)



9世紀の須恵器

#### IV. 様々な遺物と工房の風景

##### 様々な遺物

牛頸須恵器窯跡は須恵器を主に焼成していますが、その他にも様々な製品があります。瓦は6世紀末～7世紀前半に朝鮮半島から技術が伝えられたようで、日本国内では最も古い時期に生産が行われます。陶棺は近畿地方や岡山県などに多く分布していますが、九州では牛頸で初めて生産が確認されました。6世紀末～7世紀初め頃に生産が行われたようで、その特徴から近畿地方の影響を受けたと考えられます。

円筒状土製品は系譜・用途は不明ですが、韓国の鉄生産遺跡で出土するL字状の送風管に似ています。時期は6世紀末～7世紀初め頃にあたります。瓦塔は仏塔を模して作られた土製品で、東日本に多く見られ、九州では豊前地域で8世紀頃に生産がおこなわれます。

その他、硯・権など多様な製品が生産され、その系譜は国内のみならず朝鮮半島とも関わりを持ち、牛頸須恵器窯跡が多様なつながりを持っていたことを示しています。



軒丸瓦（月ノ浦Ⅰ号窯跡）



陶棺（野添遺跡7次2号窯跡）



円筒状土製品（小田浦窯跡群28地点）



瓦塔（本堂遺跡5次調査）

##### 工房の風景

牛頸須恵器窯跡では、窯と同じ時期の集落が見つっていますが、これまでの調査では、工房跡の存在を示すロクロを据えた痕は見つかっていません。しかし、集落内の竪穴住居跡や土坑内からは粘土や焼成不良の須恵器が出土しており、須恵器工人がいた集落であったことを教えてくれます。また九州大学筑紫キャンパス内遺跡からは、甕の成形に用いられる当て具・タタキ板やヘラ状工具が見つかっており、工房の風景の一端を垣間見せてくれます。



竪穴住居跡から出土した粘土  
（本堂遺跡1次調査）



須恵器作りの道具と製作工程で粘土を切り取った切削物  
（タタキ板等木製品は九州大学所蔵）

## V. ヘラ書き須恵器と工人墳墓

### ヘラ書き須恵器

ヘラ書き須恵器とは、土器を焼く前の器の表面にヘラなどの先の尖った道具で文字などを書いたものです。牛頸須恵器窯跡では、こうしたヘラ書き須恵器が多数見つかっています。その中には、税を納めるための書式どおりに書かれたものがあり、律令制が地方へ普及していたことを示す重要な資料となっています。

また、ヘラ書き須恵器の中には人名の分かるものもあります。7世紀には「大神部見乃官」、8世紀には「大神君百江」「大神部得身」「大神部麻呂」「大神部□□養」「内椋人麻呂」「押坂□」があり、これらは須恵器製作にあたった工人と考えられます。中でも「大神君・部」は多数を占めており、牛頸須恵器窯跡の工人は大神部を中心としていたことが分かります。

このように、ヘラ書き須恵器は当時の律令制の施行状況や工人の名前など、地方ではなかなか残らない情報を伝えており、極めて貴重な資料です。



おおみわべ み の かん  
「大神部見乃官」  
(本堂遺跡群7次調査)



ちくしまえのくに な かぐん  
「筑紫前国奈珂郡  
てとうり  
手東里大神部得身  
・・・  
并三人  
ちよう  
調大一厩隻和銅六年」  
(ハセムシ窯跡群12地区)

### 工人墳墓

古墳時代後期になると、全国的に横穴式石室をもった直径10～20mの小古墳が群集し、激増します。牛頸須恵器窯跡でも、中通・後田・小田浦といった古墳群が調査され、窯との近接性や副葬品などから須恵器工人が埋葬されたと考えられていました。

ところが、梅頭1次1号窯跡では須恵器窯跡内から銀象嵌鉄刀や須恵器などが出土しました。これは後期古墳の副葬品と同じ内容であることから、須恵器窯を墳墓に転用したものと考えられます。また、梅頭3次2号窯跡からは窯の焚口付近で遺体を火にかけた痕跡が確認されました。窯を墳墓にすることから被葬者は須恵器工人と考えられ、極めて珍しい資料です。

このように、牛頸須恵器窯跡では工人の墳墓として窯を転用するものと通常の古墳を使う状況が確認されました。窯転用墳墓は梅頭遺跡群に集中しており、いずれも被葬者は一人のみで、横穴式石室で見られる追葬は行われていません。こうした墓制の違いは、それぞれの集団が異なることを示しており、特に窯を墳墓に転用する在り方は福岡を含め九州では見られない墓制です。このことから、梅頭窯跡群の窯転用墳墓の被葬者は在地の人ではない可能性が高く、ヘラ書き須恵器に見られる大神部に連なる人たちであったと考えられます。



梅頭1次1号窯跡遺物出土状況



梅頭1次1号窯跡出土銀象嵌鉄刀



梅頭遺跡3次2号窯跡カマド塚状遺構



後田古墳群全景

## VI. 牛頸須恵器窯跡の歴史的特徴と今後の保存

牛頸須恵器窯跡が操業を始めるのは6世紀中頃のことです。それから9世紀中頃にいたる約300年にわたり操業が継続され、窯の数は総基数500基を超えると想定されます。このように大規模・長期間に操業された牛頸須恵器窯跡を通観すると、生産方針が時期ごとに変化しており、その在り方は極めて劇的です。では、そうした変化をもたらした生産体制や牛頸窯の管理者はいかなるものであったのでしょうか。

牛頸須恵器窯跡から出土したヘラ書き須恵器には、生産にあたったと考えられる工人名が書かれています。7世紀には「大神部見乃官」、8世紀には「大神君百江、大神部得身、大神部麻呂、内椋人麻呂、□□乎麻呂、押坂□、大神部□□養」があり、8名分の人名が確認できますが、半数以上を「大神君・部」が占めています。このことから、牛頸窯の生産工人は大神部が主体的に関っていたと考えられます。大神部は、奈良県桜井市にある大神神社を祭る大神氏に由来します。こうした工人の由来や陶棺の出土は近畿地方との関係を十分に想起させるものです。さらに、九州で牛頸窯にのみ見られる多孔式煙道窯は大阪府陶邑MT5-Ⅲ号窯跡でも確認され、双方向の交流を持っていたことを示しています。

こうした考古学的な事象に対し、文献史学側から牛頸須恵器窯跡を「那津官家」直属のものとする指摘があります。「那津官家」は『日本書紀』宣化天皇元年に那津（現在の福岡市博多）の口に修造された屯倉で、大和政権の政治・軍事の拠点でした。牛頸須恵器窯跡の操業の始まりは、この「那津官家」の修造記事後の時期であり、群内で生産された瓦が「那津官家」に比定される比恵・那珂遺跡群から出土していることは、牛頸須恵器窯跡との関りが深く、地方にありながら大和政権との結びつきを持っていたことを示しています。このことが、7世紀後半に牛頸窯が筑前で集中的な生産を行うことができた背景であり、以後この関係は大宰府へと引き継がれ、西海道一の窯場へと発展していきます。

このように、牛頸須恵器窯跡は九州の須恵器生産にとって極めて重要な位置を占めるだけでなく、当時の社会状況に的確に応じた生産をおこなっており、古代社会を考える上で極めて重要な遺跡群です。



梅頭窯跡覆屋  
(大野城市上大利5丁目三兼池公園内所在)

現在、牛頸須恵器窯跡は山中に残る窯跡を中心に12ヵ所約22haの範囲を国史跡として指定しています。今後窯跡は緑を残したまま保護を図ってゆく予定です。窯跡を保護していくことはこれを包含する山の自然環境を守ることでもあり、良好な自然環境を守るとともに、古代の須恵器生産地の有り様を広く公開・保存していきたいと思えます。

### 大野城市の文化財 第44集

平成24年3月31日

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印刷 株式会社 コーユービジネス  
福岡県福岡市博多区博多駅前3-22-26 大野ビル